はじめに

この巻では「衣服」をテーマにしています。

日本では「着物」と呼ばれる「和服」を着てきましたが、西洋では、ずっと「洋服」を着ています。

日本では蚕の繭からつくった「絹」が重用されてきましたが、西洋では綿花からつくった「綿」が重要な役割を果たします。

足に履くものにもちがいがあり、日本では長い間、「わらじ」や鼻緒で履く「ぞうり」や「下駄」が使われてきましたが、西洋では古くから「靴」が用いられてきました。

水や汗をぬぐう布にも、日本の「手ぬぐい」と、西洋の「ハンカチ」というちがいがあります。

この本では、こういった日本と西洋の「衣服」や「身につけるもの」「日常的に使うもの」に関するちがいを10個紹介しています。

自分のこと、自分の国のことは、普通だと思いがちです。でもこうやってくらべてみることで、どちらも個性があり、どちらも特別で、どちらにも独自の背景があることがわかるはずです。

日本は、明治維新、そして太平洋戦争の敗戦といった契機を経て、くらしが大きく西洋化しました。日本ならではの文化というものも、年々、減ってきています。ただ、日本らしい衣食住が生まれた背景には、この国がもつ四季や自然環境などが大きく関わっています。いわば必然として日本らしい衣食住は生まれてきたのです。

この本が、日本らしい衣食住に気づき、そのよさに気づくきっかけになりますよう。また西洋、そしてこの本で紹介しきれなかった多くの諸外国にも、日本と同じように独自の文化があることに気づくきっかけになってくれたら嬉しく思います。

岡部 敬史

もくじ

和服 …… 4 と 洋服 …… 6

烏帽子 …… 8 と シルクハット …… 10

絹 …… 12 と 綿 …… 14

和傘 …… 16 と 洋傘 …… 18

紋付袴 …… 20 と モーニングコート …… 22

ファッションにもある「アメリカ」と「イギリス」のちがい …… 24

白無垢 …… 26 と ウェディングドレス …… 28

かんざし …… 30 と 指輪 …… 32

手ぬぐい …… 34 と ハンカチ …… 36

ふんどし …… 38 と パンツ …… 40

わらじ …… 42 と 靴 …… 44

メイクと羞恥心にもある「日本人らしさ」 …… 46

和服と洋服

日本の服といえば、着物を意味する「和服」。一方、西洋の服といえば、シャツやズボン、スカートなどの「洋服」を指すのが一般的です。今では、日本人でも洋服を着る人の方が多数ですが、なぜ日本と西洋では服のちがいがあったのでしょうか。それぞれの歴史にふれながら、そのちがいを見てみましょう。

日本 JAPAN

和服

「和服」は、西洋の「洋服」に対して生まれた言葉で、主に「着物」を指す言葉です。古代の日本では、布を体に巻きつけるような簡単な服が使われていましたが、次第に身分の高い人を中心に、さまざまな加工がなされた服が着られるようになっていきます。

和服

古代の日本人の服装を調べてみると、弥生時代には、男性は「巻布衣」、女性は「貫頭衣」というものを着ていたようです。巻布衣とは、布を体に巻きつけた服、貫頭衣は布に穴を開けてそこから頭を通して身につけた服です。どちらも布を簡単に身につけるものでした。

中国大陸からさまざまな技術が伝えられるようになると、それまで麻を使った布が中心だったところに、絹を使った織物が使われるようになり、多様な色も用いられるようになりました。平安時代には、貴族の服装が華美になり、女性は正装として「十二単」を身につけました。これは身幅や袖幅のゆったりとした「大袖」と呼ばれるものを何枚も重ねて着たもので、冬にはその中に袖口の小さな「小袖」と呼ばれる服を保温のために着ていました。

庶民は、小袖や、袖なしの着物を着ていました。この小袖が、現在の着物の原型とされています。

日本の着物の大きな特徴のひとつが、生地をまっすぐに切って縫い合わせている点です。そのため平面的なつくりになっていて、畳んで片づけることができます。

一方、洋服は、曲線状に切って縫い合わせているため立体的なつくりになっており、片づけるときはハンガーに吊るします。

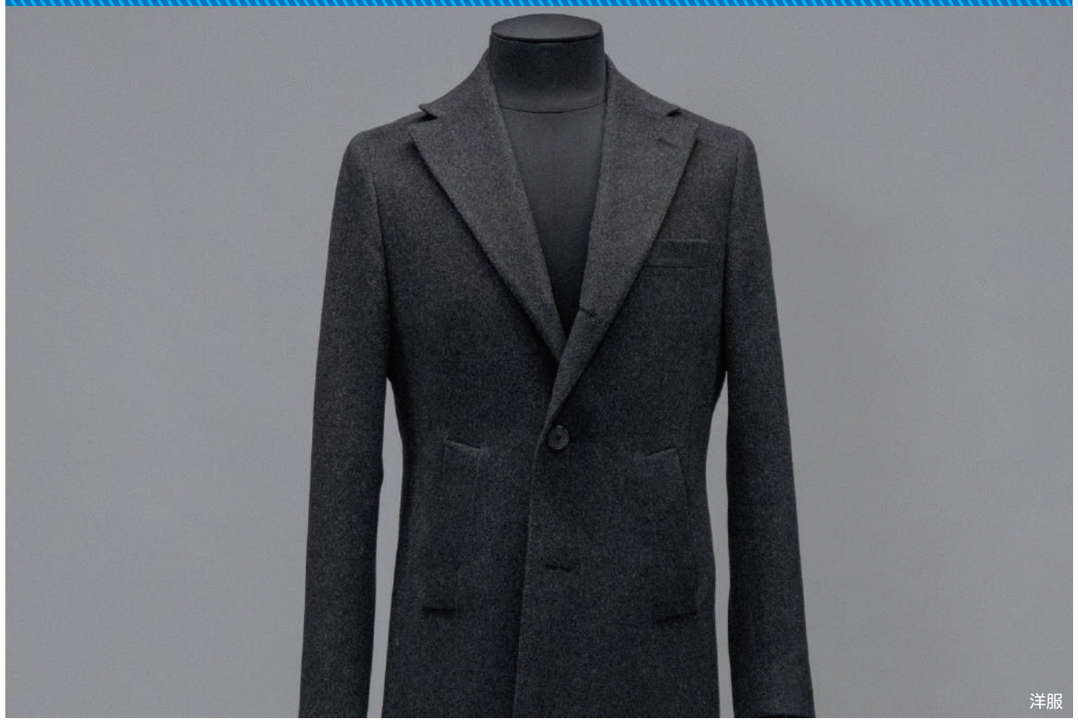
着物は1枚の反物から「袖」や「衿」、体を覆う部分の「身ごろ」などを無駄なく切り取り、これを縫い合わせてつくります。そのため、サイズを直したり、破れた部分を補正したりするのが簡単で、何度もつくり直すことができるのも大きな特徴です。

着物を畳む

世界 INTERNATIONAL

洋服

古代の西洋でも日本と同じように、体に布を巻きつけるような服を着ていました。しかし、徐々に日本とはちがう発展を遂げます。そのひとつの例がボタンの登場。日本の着物は帯や腰紐といったものを使っていましたが、なぜ西洋ではいち早くボタンを使うようになったのでしょうか。



洋服

紀元前の古代ローマでは、「トガ」という体に巻きつける大きな布の服が使われていました。日本でも「巻布衣」という体に巻きつける服が着られていたので、服のはじまりは日本も西洋もそれほど変わらなかったことがわかります。

❊

しかしその後、和服と洋服には、いくつかのちがいが生まれます。そのひとつが服の留め方です。布を体に巻きつける服は、何もしないとどうしてもはだけてしまいます。そこでいろんな方法で留めるのですが、いちばん簡単な方法は、紐などを使って体に巻きつけることです。和服は帯や腰紐など、紐状のもので巻きつけるという形から変わりませんでした。一方、西洋では、13世紀頃高級な服を中心にボタンが使われるようになり、19世紀には大量生産され庶民の服にも広く用いられるようになります。

❊

なぜ西洋では、ボタンが用いられるようになったのでしょうか。

ひとつ考えられるのが、気候の差です。日本にくらべて、多くのヨーロッパ地域は寒冷です。紐で体に布を巻きつけるよりも、ボタンでしっかりと留めた方が、冷気を遮断することができて暖かいと考えられます。一方、夏の暑い時期をどう過ごすのかが大きな問題だった日本では、紐でゆったりと着る方が適していたのです。

❊

服のつくりが立体的になっているのも洋服の特徴で、布地は曲線状に切って縫い合わせています。肩のラインを美しく見せるために「肩パッド」と呼ばれる詰め物を上着につけるのも、洋服における工夫のひとつです。上着と共布のスラックスやスカートからなる一揃いのスーツの上着の大半には肩パッドがつけられています。

洋服は曲線

コラム 袖ボタンは何のため?

ボタンは服を留めるためのものですが、留めるという機能を持たないのがジャケットの袖ボタンです。なぜ、機能のないボタンがつけられたのかには、フランスの皇帝だったナポレオンが関係しているという説があります。

ナポレオンがロシアに侵攻したとき、あまりの寒さに鼻水をジャケットの袖口でぬぐう兵士が続出。兵士の見た目にもこだわったナポレオンが、袖口で鼻水をぬぐえないようにボタンをつけたという逸話が残っています。

袖ボタン